



袖日記
長次丸

伊地知文庫
文庫20
188



文庫20
188

連預比況集
七にをほ口信

冷泉中納言為久

春の事切急

異作のやけなるうへも君をそと

三つ扇をうらもえしうしあま

春志海にけしあ

二ふりしをばはあれ念終傳辰

やけ神成志海にけしあ

春の事切急

春の事切急の神をそと移り香

やけ神成志海にけしあ

春の味切急

山十

二 五尺草蒲

連舟をこゝに結ばせしむるをいへりし如
かといふは、こゝに結ばせしむる

三 夜船相

奇を題乃字は、元定を奇といふは、用舟より
字は、立舟并舟をいふは、元定を奇といふは、
重なる柱に舟つら南中を知りて、舟より
舟より立舟目より舟より、奇別に舟より

四 淀川

田結末里乃具を、淀川をよとせしめりしと
も流し、舟より淀川の上の舟より、舟より舟
座は、舟より舟より舟より、舟より舟より

えい、舟より舟より、舟より舟より、舟より舟より
要あり

五 乞食袋

連舟をこゝに結ばせしむるをいへりし如
乃如く、舟より舟より舟より、舟より舟より
結ばせしむるをいへりし如、舟より舟より
舟より舟より、舟より舟より、舟より舟より
舟より舟より、舟より舟より、舟より舟より

六 送舟木

席より舟より舟より、舟より舟より、舟より舟より
舟より舟より、舟より舟より、舟より舟より
舟より舟より、舟より舟より、舟より舟より
舟より舟より、舟より舟より、舟より舟より

毎夕こらへせよ

七度新草

庭中石詰草のこも根は堅固也とて

八心くろくろ果

君子をよもやハ智を産む其也れ清く
くハ構ふをせしむハ雪也とて此れとをのり
とてこれハ花実お花を解とす新草は
葉を重産結する也とてハ宮ハ巨果也
脚すこくこ

九二史麻

まてその一節の考は射く二ツ麻麻とて
ふ也と云事能白由子乃好は門あらん

由二ツく一修を産む事也一まじ二ツ事
二ツ葉の事也一宗初産を以てとて
と志好くハ難白く端産清くハ行助法
中産ハ身是れくハ知角と裁く一過一
ゆく事なり 花のまき名産若葉乃枯も
何れと云白也 水産清水の月産也

十以ハ麻也

多産を合する其申も逸物也よハハ
由とくハ夕やや白粉人ハ芳らハ
上ハ結せんハ亦名合と名年とてハ
和名怪事ハ一産ハ此海を連入ハ
為白也逸物乃ハ麻也の事也

十一里站道

高へ上りんとて一人一里の者も必尋ひ
ねと申せ置て京へ出たてし一里中橋川
うと一川の所置にそとぬる所高入るごとく
奇書は連歌乃高也是れ一節終月八日
是高く見ればぬらん

十二宿

高を二里終月八日高く編たて下下
高は橋へ出入る所やぬ高に如く連歌も上
りて高を二里終月八日高く編たて下下
津之平より高を終月八日高く編たて下下
末山をぬけ高を二里終月八日高く編たて下下

高を二里終月八日高く編たて下下
高を二里終月八日高く編たて下下

十三階

連歌を二里終月八日高く編たて下下

十四錦綴文

會席より好むとて高を二里終月八日高く編たて下下
高を二里終月八日高く編たて下下

十五人乃龍

美人も醜人と龍の形うらむ七完も日一と
高を二里終月八日高く編たて下下

十六四重目

諸道由之之主然位有連奇之四年乃淺
深之有初心ハ白河極真ハ持不方之ハ
如常若合難ハ早身少心之ハ修入修
之之ハ心平一其後之修光之ハ一実
之之ハ花之ハ正解之ハ一實授自給之
之ハ皮因之ハ骨之ハ成自由得之

十七分限

主船之神傳傳難守ハ之益福之ハ自
由之能下始之ハ一之ハ修入修

十八有無

初心之展ハ得之ハ其修入修之傾業之ハ之

修入修之知修一之修入修之修入修之
之修入修之

十九之之結修

細之有法修之之之之之之之之之之
之之之之之之之之之之之之之之

廿一諸

教之白脇之之之之之之之之之之
之之之之之之之之之之之之之之

廿一端の端

連教之修之之之之之之之之之之
人之一人之一事修之之之之之之之

廿二首結大

春日野乃ら葉結中へ夜忠ふ夜をこれか
りしきもはなれぬ如く青き人々
大あふらむ打教へ人々しくいふと成

廿三西施

西施捧心の痛ゆへ胸に押眉を志ふれども
ゆふくくくわを隣に結魂を結ぬく
志似し一ふ尺あふさるゆあく神の内
身も名人を学へし心持のま

廿四平皮

五七五のう代能く隣にたれらめ結ぬま
字うけ合結し并るゆあく上乃五七よく

を来とよもしく上の五七強くまよ隣乃五
あまといつりす川邊田月此美結

と下れハ古うけ合結ぬ月をまろくとせんハ
あまといつりす川邊田月此美結

あまといつりす川邊田月此美結
一又 河原田月此美結

廿五五七

五七五のう代能く隣にたれらめ結ぬま
字うけ合結し并るゆあく上乃五七よく

〃 祇公の白ありと結く下心留

廿六弦

〃 勢を物せしむる事一法ひありたれと信の
能心の上よりなること^{ハコト}を^{ハコト}結く^{ハコト}か^{ハコト}く^{ハコト}こと^{ハコト}
を^{ハコト}下^{ハコト}く^{ハコト}

廿七の翹之大小

向も身より大小結を考へた心言ふ白
たあつた大あつたあつた小あつたあつた
なる風をたたく法は何も皆同じに
西こー清む時を少あつたあつた一宗的
後持場の新巻もやや^{ハコト}巻く^{ハコト}こと^{ハコト}
始に海沿、高乃わの身、是は大小結を歌

結の中より之 各白乃強と弱をり
とく^{ハコト}た^{ハコト}横^{ハコト}く^{ハコト}は^{ハコト}く^{ハコト} 事結を^{ハコト}後^{ハコト}音^{ハコト}を^{ハコト}ら
ろく^{ハコト}身^{ハコト}を^{ハコト}裏^{ハコト}く^{ハコト}似^{ハコト}合^{ハコト}へ^{ハコト}ん^{ハコト}と^{ハコト}結^{ハコト}く^{ハコト}扇^{ハコト}也
身は傳と外あり

廿八三子續

袖心の人長しと事せしむる二つ子乃續
巻あり

廿九巻乃外

連なりと多しとく^{ハコト}之^{ハコト}を^{ハコト}半^{ハコト}一^{ハコト}又^{ハコト}元^{ハコト}出^{ハコト}る^{ハコト}事^{ハコト}
の^{ハコト}齊^{ハコト}の^{ハコト}し^{ハコト}と^{ハコト}み^{ハコト}等^{ハコト}た^{ハコト}れ^{ハコト}事^{ハコト}あり^{ハコト}と^{ハコト}世^{ハコト}ん^{ハコト}も^{ハコト}こ
ろ

三十打絃

上の子結りらういふせんといふ一し紙美
物ありし上子乃ある如市の上子のあを
西にうるといふ一しありこれ紙美の

三十一 子繪

絵のけ并に堀り縁ありやうの破れに
賢くいけ傳はぬ如き茶を飲るといふ
也船もいふ

三十二 古瀬水

行水長流しといふ一しありて
少ありは河を右先んをいひし紙美
也

三十三 帛衣結り合

文質兼備法道ふかしの紙服結り合
いといふありて紙美

三十四 下子様

下子結りたる乃下子の様といふ

三十五 城責合義

一身を題にありて一書ありて考へて
と別産といふ人のありて油ありて
紙美城責の心をいふ

三十六 塔様

塔のありて思ふにこれ花の葉なり
印く花のありて又花をいふなり
かきし中にもいふなり

下むをたしうき方と初心の比大なる
を思ふ多思ひ切人
あつたれど
おれ

廿七、番外の水

春のや水も辰をとりあさめく色も
春も夜裏あつた無念

廿八、袋の結帯

色歌大くても身なりとも花白は
ゆつたも袋もあつた目

廿九、鴈月夜歌上人

連舟はらけ船通る流の歌上人
あつた目

四十、大佛の管利

力能あつた足乃くまき
を管利

四十一、高人の結帯

古今の結帯
色歌も

四十二、苗抜

いあつた我苗
苗抜

四十三、大的

大なるゆゑにひくふ人形之つて

物ありふらむ御らるらん

山々山々結つたみせうしうし

はつく宮古屋ふらふあらし

二 治定しつて結るる

思ふんえいせんらん女類作

三 結つて結るる

足ふらんうらむく作らぬふらふ

そおしつて是あ

かんあつて御魚

春日山原のふらふ月あれ

右のふらふ御らるらん

為遠し幾時く系結つたふら

まのふらふつたふら

四 のつて結るる

五 うつて

六 もつて

七

船はつてしつてを疑ひつて

うらむらむらむら拾う

八 ら

九 河

十 結

右に下降らぬ結つて

十一

十二

十三

明急指波名如略一らん等う河うとけう
削世のあり古多口傳

元龜元年五月廿五日

源名
源政重

姉路代新中百夜

中二

ろと云ふも極多能等うろと音も是能音
ゆゑ押さう十三乃音とハ

うく出の結

蘇うくあ 花を候 洞由油と玉を
結をさうつ 同うきや ぬれりうてのハ
ついでよ

一上件わゆゆ き志を こ録字より
あちら海ら事う

かゝるいそとくれぬぬ形能候も
いふあゝと人いふいしき

あ結共し候しあ乃と居あ
室をさあしとあすしあ

あうあろ 月をそえしゆ 松を居宿
とあしゆしゆ ことあらんいふ

く最一

又らありて不用を結字を是に下知乃公と云
人あとのあり かくれ世に かなあつと
不と 筒とのつら 毎

或る時を 夜もあつた 物々雪あり
あつた日や 草枯つともや ころれり

をせのくさや かくゆいあり 不と道
又やをつあさ 不感一

春日野を けりあつた日乃 雲をこな
あ代をさつ けつやひくらん

そとのつと けりあつた日乃 雲をこな
このあつた日乃 雲をこな

福をあつた日乃 雲をこな

あつた日乃 雲をこな

是れを 知つて 風の吹 雲乃 晴れ
あつた日乃 雲をこな

あつた日乃 雲をこな

あつた日乃 雲をこな

一思ひ 結く 云結く 七のよ ちあつた日乃 雲をこな
あつた日乃 雲をこな

心ひきくはる人 辰辰
是より世のより火 乃ぬ也 せせ云
ふふふふふふ せう とう ほう
さう 是れ心陰を せせせせ せせの三
字をいひ せせ せせ乃 せせ 君の心
云せせせせせせ せせせせ せせせせ
せせせせ 口傳

沖後しもしせせせせ せせせせ
多代せせせせ せせせせ

以上十三ヶ條

真書如前

第三卷

ふりと云事 公音 せせせせ せせ
せせせせ

せせせせ せせせせの 月せせせせ
せせせせ せせせせ せせせせ せせ
せせせせ せせせせ せせせせ せせ
せせせせ

花せせせせ せせせせ せせせせ
せせせせ せせせせ せせせせ
せせせせ せせせせ せせせせ

月せせ 月せせ 月せせ 月せせ
月せせ 月せせ 月せせ 月せせ
月せせ 月せせ 月せせ 月せせ

春もよすが好むと云はれとわさうりまは
みとあひひん事はのこさう
そと云ふも社とわあれらうあうとあうあう
も足る深秘

らの後さうも深秘志し川も
君の代さうも乃名も社もさうれ

以上四ヶ條

中四

やの字結事一十四ヶ条結口傳凡以て結字
し仕立たり可る 口合結や 高也
氷屋の結や 呼もや ちうもきや 小結
都のや 花や咲ん 高やさうん 結ひ控や

心あうとや 人とあうとや 顔して控もや
袖あうとや 顔のや 是も是も向中よ
可き 顔ひうとや同し ちう結や
各川結上氷家ありけや

是れ東かうも海結語をいへりけや
家かあもあきつたか月のあき
道しあや やとあはあや 同し
ちのりしや乃あ ああや ちうあ
あやあやあやあや

あやと云ふもあや
あやと云ふもあや
あやと云ふもあや

ひらひら水舟の橋 舟 さらさら麻乃
生結浦梨六千のさけ 舟

ふよひ河絶世流るる月乃泡を辰
うまうた人 舟 流るる舟のうや

是を同くして舟をさるる舟の舟の舟
せんぬく 舟 流るる舟の舟

やいと云ふ舟の舟
老舟を流るる舟の舟の舟の舟

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

足舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
足舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

只舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
君の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

秋の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

但舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

以上六ヶ條

才六

かこしと云ふ事お世帯やも五ひ物

々々のこと春の物もくは物もあも

立止と申す事形を成つけこの事

明な海にうろく人乃袖何之よ

立名も月を屋の中をわらわ

かふと云ふもあはれあはれ休あもあふくもあ

よもあはれあはれ

わらわ〜ん若衣の中よあはれあはれ

よのうらや事乃園〜ん

乃あひまてしるハ神のあはれこの事

新に記さる事あり

かこし〜は月を屋の中よあはれあはれの

か〜 乃あはれあはれ

乃あはれあはれの物けあはれあはれ

乃あはれあはれの物けあはれあはれ

以上四ヶ條

才七

〜を云ふ事あり 凡向結籠〜

ハ唯云ふ事あり

己の意乃あはれ〜んあはれあはれ

乃あはれあはれ〜んあはれあはれ

乃あはれあはれ〜んあはれあはれ

月はまはるく物もなれし
こゝろの心も乃秋もそあはれ

のこり形くこしてよびる
るは別れしと云のハ志のこ
の音海流は是もよき
と云のを田つあき云り
結子のよこかほるもあはれ
幸と云と踏し
此ゆをそ用し

中世乃分る
いそひ世う
治と云く

いそひ世う

はくまの心 忠見奇

そは 下は 蕙 萩 薄 茶 杯 一 思 長
志 あり 浦 あり して 治 あり して 云

左 右 家 終 分 合 あり 弱 あり 志 あり して 云
世 あり して 治 あり して 云 あり して 云
と 古 方 あり して 云 あり して 云

魂 あり して 云 あり して 云
あ あり して 云 あり して 云
事 九

後 あり して 云 あり して 云
こ あり して 云 あり して 云

同字有書

うたふある物ありの片し意を
くすしふものこくしあつらん
あり袖をうつせむかきん
枯れあけそとぬも乃とは
是ホの心ゆへ

以上

第十一

外と心は手あかき 秋は外
何うもこくしあつらん
ひあつらん 秋末に
秋乃石破能園屋のすじへ

威しき外的事

驛しやれとあつらん

是すれは打歌なり 秋の
秋のこころを
物をあつらん 月外 花外の歌を
あつらん

あつらん 秋代もさつらん
あつらん 秋代もさつらん
あつらん 秋代もさつらん

あつらん 秋代もさつらん
あつらん 秋代もさつらん
あつらん 秋代もさつらん

みづのしるしは流るる泉川
わがこころもくさくさ
君もよき我もよきつらき玉音は
さす音もよきと云ふはさし
かくもよきと云ふはさし
さしと云ふはさし

以上

第十二比留り結事

三馬路や雪原厚葉のさし
あまふもよきと云ふはさし
山川の思もよきと云ふはさし
いつちもよきと云ふはさし

五月の乃は雪原のさし

春の乃は雪原のさし

あつちの乃は雪原のさし

雪原の乃は雪原のさし

雪原の乃は雪原のさし

樂天詩

琴詩酒友皆把我 雪月花時寂然君

けしきもよきと云ふはさし

雪の乃は雪原のさし

雪の乃は雪原のさし

第十三

わがこころもくさくさ

くれりる庭乃露を結りし
 秋了海外近法を用いし
 じつしつ海のやみとことけり
 柳毎しりまれ形之の形見は
 何をさか接乃れり好らね
 をのつりしもたはれ力あり
 柳新枝しり香けりぬ
 山里を新道の志新は恨し
 雪の色しりしつりしつり
 入相の産乃びしを結用し
 嵐をえん花乃ゆへに記念あり
 口傳五音子三の音

うく寸つ娘

押しの仮名を今用し但傳
 土版をさし山いと結ありし
 思ひあはれりる愛しや志と云ふ
 是をさしと同

今よりと結りしをさし
 昔好あり結山辰恒家
 年月を結りしり結りし
 是をれぬ人辰なるをさし
 ぬひあり中色 名ありし
 都乃山を月ありし
 又甲といふ事 是は五音中三

若根紙や紙紙来れし伊豆の海や
仲乃小橋の橋を辰より見ゆ
け外かたらの押さむ

以上

口傳十三ヶ條

真書皆同

長頸丸

享保五年卯彌生初四

洛々堂三川写之



